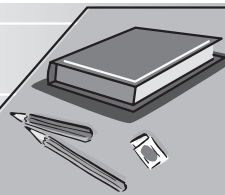


# 学生時代と図書館 78

## 「一洋図書との出会い」

岡本 信照



大学図書館といえば、レポートや論文などに必要な図書を借りる場であり、試験勉強をする場だというのが一般的な利用目的ではないだろうか。私も学部生時代はその例に漏れなかった。しかし、大学院に進み、図書館を利用する頻度が高くなるにつれ、もうひとつ利用目的が加わった。それは、書庫に眠る洋図書の涉猟である。

きっかけは卒業論文の執筆だっただろうか。4回生になってからゼミ担当の先生に勧められ、スペイン語で書かれた文法書を初めて借りてみた。もっとも、それまで原書を読んだことがない訳ではなかった。ただし、それは講読の授業でテキストとして使用されたものを輪読したというだけの話である。それ以外では、当時流行した映画の英語原作のペーパーバック版を買ってきて読んだことが二・三度あった。それらは読み通したつもりだったが、すでに映画を通じてストーリーを知っているのだから、実は読めた気になっていただけだったのかもしれない。したがって、本格的な分厚い学術書を専攻語で読むのはさすがに初めてのことだった。しかも当時の読解力でなら、辞書を引き引き何時間もかけてようやく数ページというのが力の限界だっただろう。当然、読破など無理な話で、結局のところ引用する必要箇所を数ページ読んだだけだったように記憶している。これがスペイン語原書による学術書との最初の出会だった。

大学院でスペイン語の史的 연구를テーマにしようと考えていた私は、4回生の春休みに「スペイン語史」の専門書を借りることにした。しかし、今度は誰からも強制された訳ではない。ともかく原書を読破してみたくなったのである。また辞書を片手にのろのろ解読を始める破目になった。だが、ある時ふと気づいた。最初のうちは知らない単語が頻出するために読解は苦痛だが、重要な用語は何度も繰り返し現れるため、ページが進むにつれ、辞書を引く手間が段々省けてくる。それに、著者の文体にも徐々に慣れてく

る。喩えて言うなら、読解は車の走行のようなものだ。燃費=労力が余分にかかるのは加速時だけで、いったん軌道に乗ると案外スラスラ進むものだと分かった。それに、誰からも強制されない読書だから、飛ばし読みをしてもよいという気楽さもあった。ともかく最後まで目は通した（つもりだった）。はたして内容がどれだけ頭に入ったのかは心許ないが、一応「やり遂げた」という自己満足は得られたような気がする。以来、洋書の学術書というものを妙に意識するようになり、時間があれば書庫を覗きに行くのがちょっとした楽しみにさえなった。専攻のスペイン語だけでなく、英語やフランス語による専門書も時折チェックした。

こうした経験は留学先で功を奏した。言うまでもないが、留学すると、限られた時間内で原書を読む必要にしばしば迫られる。留学前に原書に親しんでおくことがいかに大切かを実感した。留学と聞くと、どうしてもオーラル・コミュニケーション力の方に意識が偏りがちになる。しかし、滞在先の大学で授業を受講することが第一目的である以上、レポートや試験などのために、実は読み書き能力が問われることが意外と多い。土台のしっかりとした語学力を身につけるには、原書読解の訓練を避けて通るべきではないという私の考えは今も変わっていない。

もちろん、大学図書館に揃っている和書もたいへん素晴らしい。しかし、様々な外国語の書籍が一ヶ所に集まっている場所は、国内のどこにでもあるものではない。その意味で、本学の書庫で出番を待ち構えている膨大な量の洋図書のコレクションはきわめて貴重な財産だと思っている。改めて振り返ってみると、洋図書との出会いを取りもってくれた大学図書館が今の仕事の原点だったのかもしれない。

おかもと しんしょう（准教授・スペイン語学）